

よへえぬま 与兵衛沼窯跡

仙台市教育委員会 関根章義

所在地	宮城県仙台市青葉区小松島新堤、宮城野区蟹沢
立地環境	台原・小田原丘陵ほぼ中央、標高 40 ~ 75 m の丘陵斜面
発見遺構	須恵器窯、瓦窯、堅穴建物、堅穴遺構、溝、土坑
年 代	8世紀中頃～9世紀後半

遺跡の概要

仙台市街地の北方に広がる七北田丘陵のうち、台原・小田原丘陵のほぼ中央に位置し、近世に農業用水池として造られた与兵衛沼の北岸に窯跡は分布する（第1図）。台原・小田原窯跡群の一部であり、南西には8世紀後半から9世紀初頭の瓦窯と瓦工房が検出された舟江遺跡や神明社窯跡が隣接する。

与兵衛沼窯跡から周辺の主要な遺跡までの直線距離は、多賀城跡まで東へ6.5km、多賀城廃寺跡まで東へ7.0km、陸奥国分寺跡まで南へ2.4km、陸奥国分尼寺跡まで南へ2.5kmである。

1. 立地・地形

仙台市街の北部に東西に長く伸びる七北田丘陵東端部の南側斜面に位置している。七北田丘陵は、奥羽山脈より太平洋側へ伸び、北側を七北田川が蛇行して東流し、南側には仙台上町段丘が広がる。与兵衛沼窯跡は、七北田丘陵のうち、台原・小田原丘陵と呼ばれる丘陵の、標高40～75m付近に立地している。

2. 規模・構造

窯跡の範囲は、東西約800m、南北約600mで、面積は約13.4haである。これまでの調査で、蟹沢地区東地点や南地点では多賀城II期の窯が検出され、蟹沢地区西地点では多賀城III期の窯が検出されている（第4～6図）。さらに、新堤地区では多賀城III・IV期の窯が検出されていることから（第3・7図）、与兵衛沼窯跡では、時代が経つにつれて西側に窯を移しながら操業していたと考えられる（第2図）。

3. 出土遺物

多賀城II期から多賀城IV期の特徴を持つ瓦が出土しており、軒先瓦や丸瓦・平瓦だけではなく、道具瓦も出土している。また、須恵器は壺や甕、錘のほかに、特徴的な形状の風字硯も出土している。

4. 系譜・供給先など

与兵衛沼窯跡から出土した瓦は、多賀城跡や陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡から類似する瓦が出土しており、これらの遺跡へ製品を供給していたと考えられる。特に棟平瓦は、日本国内では多賀城跡から出土しているのみで、他には朝鮮半島や中国で確認できるだけである。また、水切瓦も日本国内では中国地方に分布が限られており、与兵衛沼窯跡への技術的な影響を考えるうえでも注目される（第8図）。

関連文献

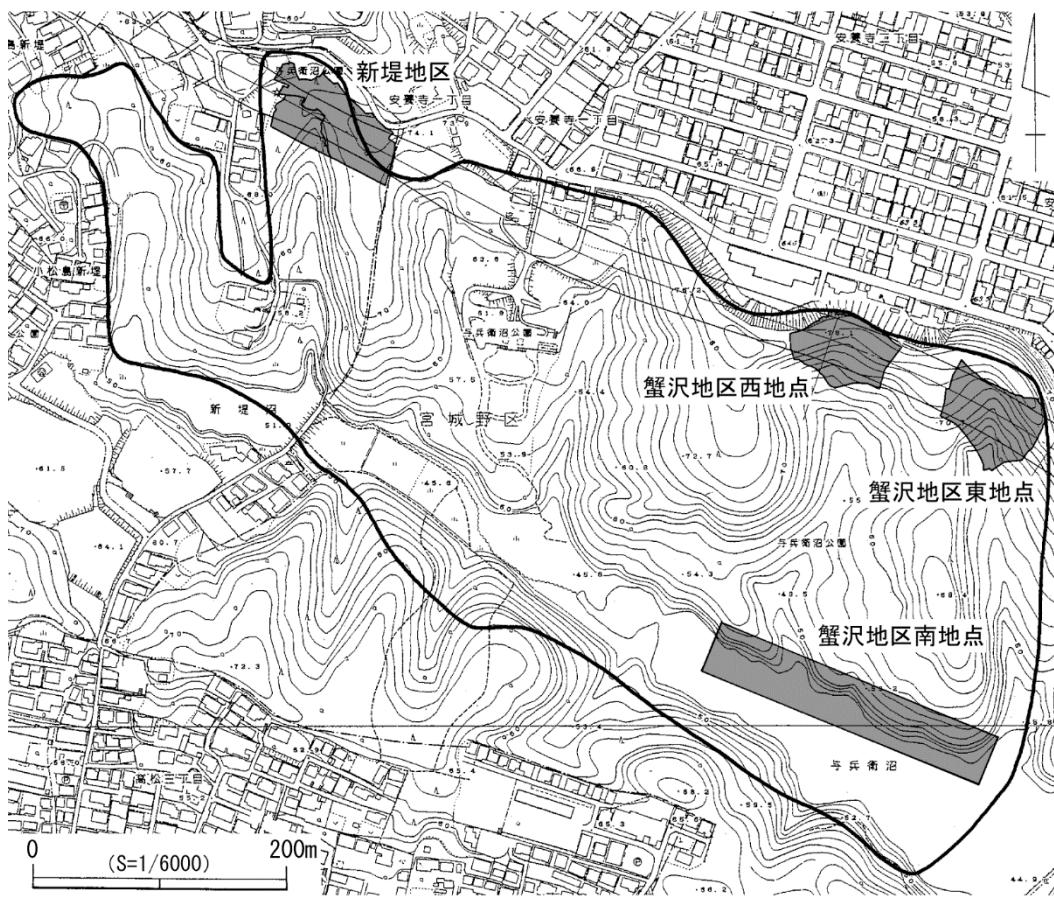
- 古窯跡研究会 1973 『陸奥国官窯跡群－台の原古窯跡群調査研究報告－』
- 佐川正敏 2009 「東アジアにおける仙台市与兵衛沼窯跡の位置づけ－瓦工房跡調査の基礎知識と平窯の起源・系譜を中心に－」『アジア文化史研究』第9号 東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻



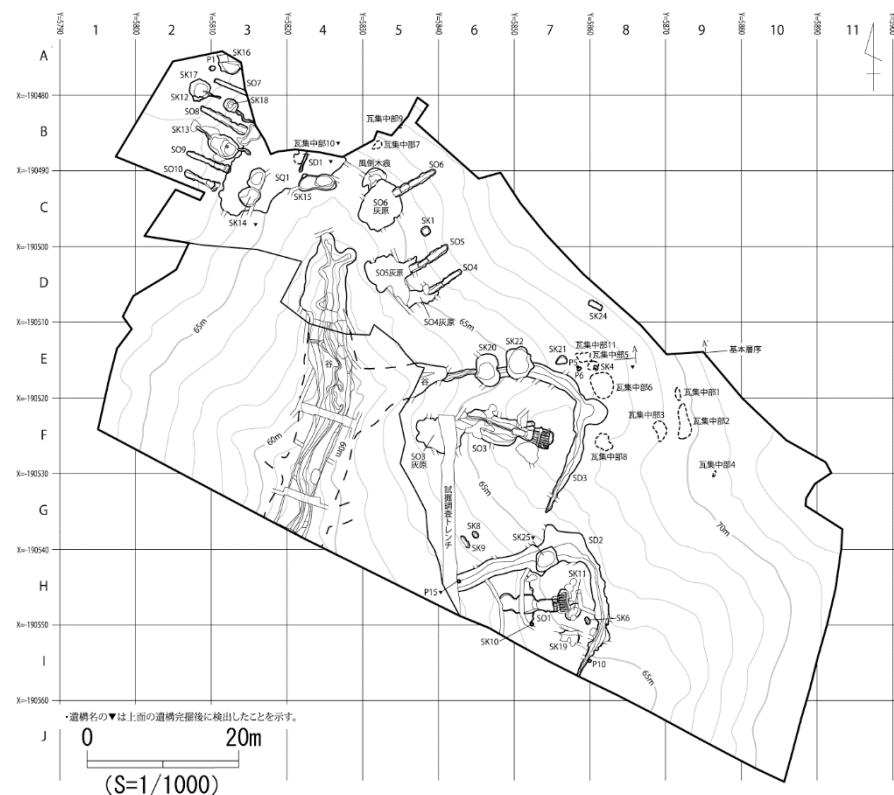
第1図 与兵衛沼窯跡の位置

3 仙台市教育委員会 2010『与兵衛沼窯跡』仙台市文化財調査報告書第366集

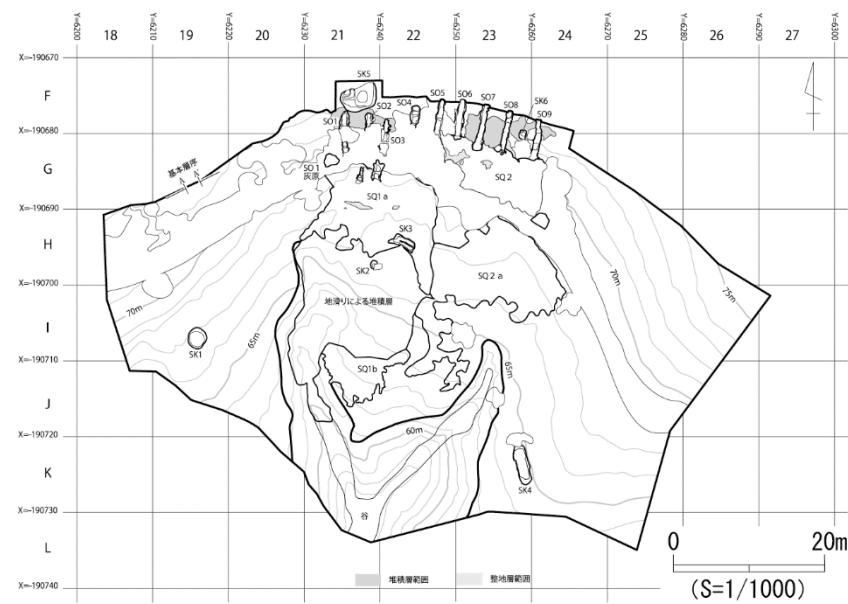
4・5 仙台市教育委員会 2012・2013『郡山遺跡32・33』仙台市文化財調査報告書第406・417集



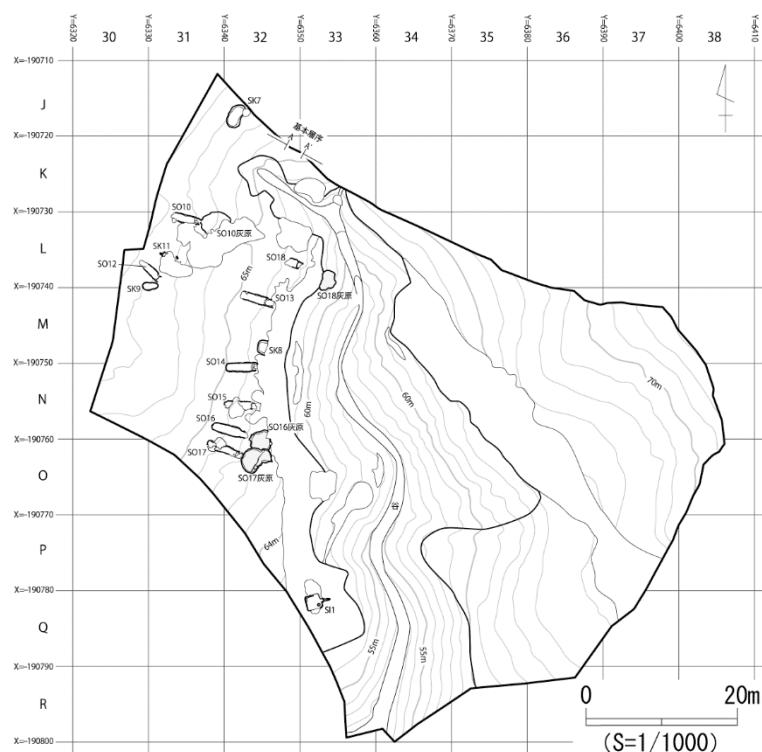
第2図 与兵衛沼窯跡全体図（文献3・5から作成）



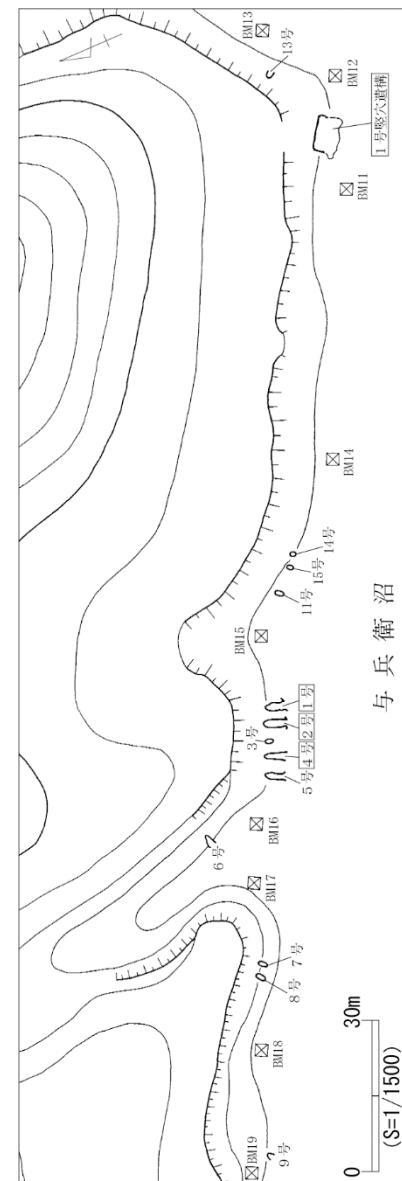
第3図 新堤地区遺構配置図（文献3に加筆・修正）



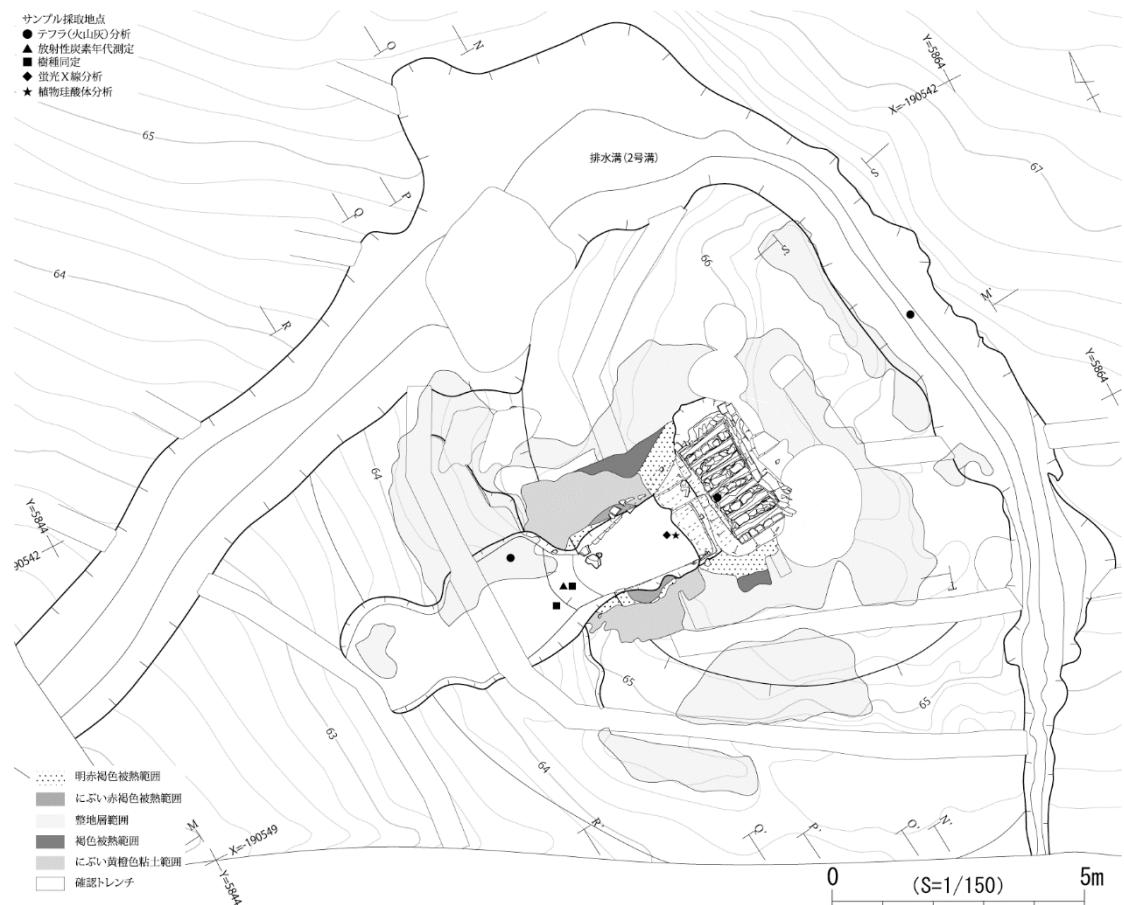
第4図 蟹沢地区西地点遺構配置図
(文献3に加筆・修正)



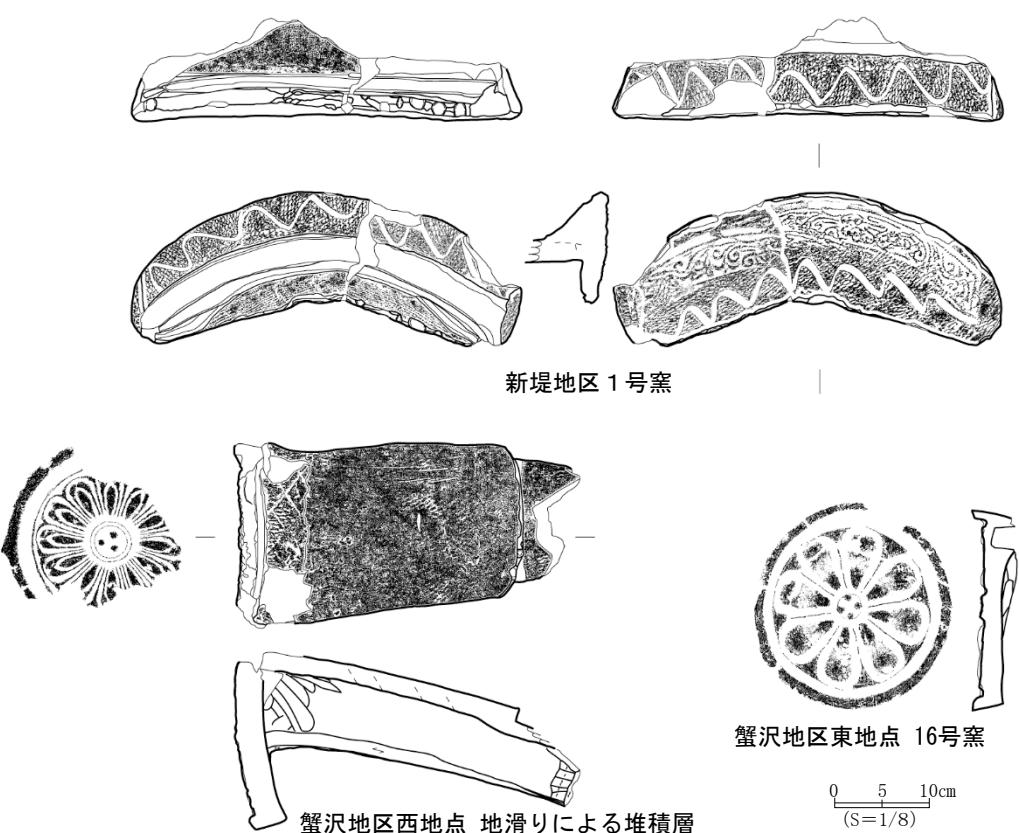
第5図 蟹沢地区東地点遺構配置図
(文献3に加筆・修正)



第6図 蟹沢地区南地点遺構配置図
(文献5から作成)



第7図 新堤地区1号窯（平窯）平面図（文献3に加筆・修正）



第8図 与兵衛沼窯跡出土遺物（文献3から作成）